

15. 漆

縄文時代から江戸時代を経て現代にまで、幅広い用途で使われた漆は、人々の生活を豊かにしてきました。江戸時代には茶の湯の興隆から、名人と呼ばれる蒔絵師も現れ、現代に制作が続けられています。

江戸時代 **美術工芸品** 江戸時代後期には、松江藩松平家 7 代藩主松平治郷（号：不昧）の影響で、茶の湯に用いる茶器が多く作られました。塗師・初代小島漆壺斎（～1830）は、松平不昧からの厚遇を受け、江戸の蒔絵師・原羊遊斎から蒔絵を学び、不昧の指導を受け、多くの茶器を制作しました。歴代漆壺斎は、初代が制作した漆器を作り続けることで漆の技と不昧の美意識を現代にまでつなげています。

蒔絵師・勝軍木庵光英（1802～1871）は、高い蒔絵技術を持ち、松江藩松平家 9 代藩主松平齊貴に重用されました。2 代春光にその技術は受け継がれました。光英・春光ともに、華やかな蒔絵の作品が特徴です。

日常の漆器 松江城下の発掘調査では、黒漆塗に朱漆で文様が描かれている木椀などが出土しています。武家屋敷の跡地から出土しており、武家の家では漆器が一般的に使われていたことが分かっています。

その後 明治時代に入り、松江藩お抱えの塗師や蒔絵師などは、漆壺斎のように一部は制作を続けられるものの、藩の庇護を失った職人たちが作品制作を行うには困難が多く、勝軍木庵春光は、明治時代に松江から関西に移住したと伝えられ、以降作品が見られなくなります。その中で、明治10年ごろに、松江藩の駕籠塗り職人だった坂田平一が唐物漆器に似せて制作した漆器を、当時の島根県知事・籠手田安定が、明治20年ごろに島根県の特



初代小島漆壺斎《菊蒔絵棗》
松江歴史館蔵



坂田平一《桐鳳凰文会席棗》
松江歴史館蔵

産品とすべく「八雲塗」と名付けました。八雲塗は、絵を色漆で描いた後、飴色で透明な透漆を全体に塗布し、研いで磨き上げる技法が特徴です。明治・大正・昭和時代にかけて、多くの八雲塗が制作されました。1902年ごろは、松江市と簸川郡も含めて、製造戸数62戸、職工数123名が八雲塗製造に従事していました。



漆が入れられた弥生土器と漆原木
(約2300年前、西川津遺跡出土)
島根県埋蔵文化財調査センター蔵

歴史（そもそも） 縄文時代から、漆は器に限らず、装身具などの装飾や接着剤など様々な用いられ方をしていました。島根県で出土した特筆すべき遺物は、土器の中にベンガラ漆が残った状態で出土した漆液容器です（夫手遺跡（松江市手角町）出土）。日本列島で見つかった漆の最古の漆工道具であり、全国的にも重要な資料です。また、松江市の西川津遺跡出土の弥生時代前期の漆液容器は、容器内に固化した漆液が残り、外面の赤色漆からはベンガラが検出されています。同じ遺跡から出土したウルシ原木には、幹を一周する傷跡があり、当時の漆液採取方法をうかがうことができます。

古代には、松江市大草町に位置する出雲国府跡で、漆紙文書が発見されました。漆紙文書とは、古代の役所で書かれた文書等が古紙として漆工房へ払い下げられ、漆容器の蓋として使用されたものです。史料や考古資料、美術工芸品からも松江市内における幅広い漆の活用方法がわかっています。

（大多和 弥生・丹羽野 裕）

【参考文献】

- ・『松江市史』通史編5「近代」松江市、2020年
- ・『松平不昧－茶のころ』松江歴史館、2018年
- ・『URUSHIふしぎ物語一人と漆の12000年史一』国立歴史民俗博物館、2017年
- ・石村春荘『八雲塗と其の変遷』改訂増補版、1961年